ここあ

灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここあ

【Ｎコード】
Ｎ９５９３Ｘ

【作者名】
灯

【あらすじ】
あなたにとっては何て事ない一言。
それだけで、彼は私にとって特別な人になった。
その彼から告白をうけ、付き合うことに。
しかし彼の幼馴染の兄妹が邪魔をしてきて！？
ラブラブになれる日はくるのか？（すでにラブラブ？）

イラスト置き場（前書き）

イラストが苦手の方はご遠慮ください。
イメージを壊したくない方はご遠慮ください。
ただの自己満です。
すみません。

イラスト置き場

☆＊・。。・★・＊・。・・☆。・・。・★。・＊・・☆。＊・・
＊・★・＊・・・＊☆・。・
★☆＊・。。・★・＊・。・・☆。・・。・★。・＊・・☆。＊・・
＊・★・＊・・・＊☆・。・
★

主人公たちを差し置いて脇役です。

＊万里　龍太＊

http://3067.mitemin.net/userpageimage/viewimage/icode/i355570/
>a href="http://3067.mitemin.net/i355570/" target="_blank"><image src="http://3067.mitemin.net/userpageimage/viewimageicon/icode/i355570/" alt="ここあ ＊万里、龍太＊">

万里描きやすいです。自分に素直でこの2人好きです。

☆＊・。。・★・＊・。・・

イラスト置き場（後書き）

てか画像くっついてないですよね？あれ？

1（前書き）

Ｒは念のためです。
１８になりそうな部分だけお月様行きです。
日本語の苦手な作者です。それでもいいという方だけお入りください。

1

あなたにとっては何て事ない一言。
「ねぇ、梁取(やなどり)さんはどう思う？」
それだけなのに、私にとってはあなたが特別な人になった。

クラスで、席が近い者同士グループを作っての意見交換。
いつも私は居るか居ないか分からない扱いで、意見を言おうと頑張っても言葉を挟めないのがいつものこと。
もちろんこの日も同じで、誰も自分の存在はないかのように話は進んでいた。４人グループで順々に聞いているのに何故か私の番になる前に話が盛り上がって、そのまま聞かれずに話が進む。
自分から意見を言えるほどの勇気もない…本当に自分でも自分が嫌になる。
悲しくなって少し俯いていたとき、声をかけられた。
「ねぇ、梁取さんはどう思う？」
空耳かと思って声の方を向いたら彼は私を見ていた。嬉しくて、初めは夢でも見てるかと思ったけど、現実で。すごくすごく胸がいっぱいになった。
なんとか意見を、たどたどしくでも言い終えた後、あなたはにっこりと笑って、「うん。俺もその考え、良いと思うよ」と言ってくれた。
その笑顔も、とてもきれいで何故かすごく泣きたくなった。それからずっと彼は私にとって特別な人。秘かに想い続けてた。

だから、

「ずっと気になってて…俺と付き合ってほしい…」
そう言われたとき、すごく嬉しかった。私なんか、って思ったけ

ど、そう言ってくれるあなたに少しでも何かを返したくて、こんな私で良いなら側にいて彼に喜んでもらえることしたいと思ったの。

＊＊＊＊

さわさわと風が爽やかに撫で、心地よい日の光に照らされながら私たちはお弁当を食べていた。

「おいブス。その汚い手を離せよ」

ズズズーと居たたまれない気持ちを押し殺し、私はジュースを飲む。

「はぁ！？目腐ってんじゃない？こんな美少女に向かって…つーかあんたが放しな！チビッ！！」

あ〝ぁ！？チビだとぉ！？と罵詈雑言が続く。ここでも私は空気と化している。

「いや…、二人とも放してくれないかな？ご飯食べれないし…」

と少し困ったように言ったのは恐れ多くも私の彼氏…神木瞬君。その両腕にがっちりとしがみ付いているのは彼の幼なじみの二人だ。神木君は学年でも有名な人で、（すごくかっこいいからモテモテです。優しい性格がそのまま顔に出ているんだもの当然だと思うんだけどね）かっこいいという理由だけではなく、その両腕にいる幼なじみで、って言った方がいい気もするぐらいだった。

幼なじみの矢吹万里さんと龍太君は兄妹で、二人は大の瞬君好き。瞬君への好きっぷりはすごいもので、この学校でその事を知らない人は居ないんじゃないかと言われるくらいだった。

二人（三人）ともとても整った顔立ちで、万里さんが自身を美少女と言ったのは間違いではなかった。

兄の龍太君は少し目つきが鋭くて少し怖いけど、童顔（って言ったら怒られそうだけど）だからか、瞬君を奪い合ってる二人を見るとちょっと可愛く思えてしまう。もちろんまだ喧嘩は続いていたりします。

「梁取さん…ごめんね」
ふと謝られ、瞬君の方を向くと彼は申し訳なさそうにしていた。
「本当は二人きりで食べたかったんだけど、二人がどうしても会ってみたいって言ってて…」
私なんかと二人きりで食べたいと思ってくれるなんて。
残念そうに謝る彼に胸をときめかせながら慌てて返事をする。
「ううん！神木君の大切な人に会わせてもらえて、私嬉しいよ」
吃驚してる神木君。でも心からの言葉だから。
彼が二人を大事にしてるのは知ってる。その二人に会わせてもらえるなんて…こんなに幸せでいいのかな？
「ありがとう」
と言いながら、嬉しくてついついふにゃりと顔をゆるめてしまった。まさかこんな締まりのない笑顔に神木君がときめいてくれていたなんて、知りもせず。
「でも…」
と神木君が何かを言おうとした時、タイミングよく放送が鳴った。
『2年B組神木瞬君今すぐ視聴覚室まで来てください。繰り返します…』
「おい瞬！呼んでるぞ！早くいけよ」
「そうだよ瞬ちゃん！後は心配しないで」
えっ？と、戸惑う瞬君をぐいぐい押しながら屋上から校内へ入れるとすぐさま扉を閉めた。呆気にとられて見ているとすごい勢いで龍太君が振り返ると、
「おいお前！！言っとくけど俺はお前なんか認めないからな」
と睨まれた。
「ふふ、万里は許してあげる」
「はぁ！？お前何言ってんだ！？」
「だってこの子と付き合ってたら万里の良さに気づいてくれるじゃない」

万里の方が何百倍も可愛いし。と笑顔たっぷり。
か、可愛い…。
はぁーとずいぶんと長いため息をついた龍太君はげんなりとしていた。
「むしろお前なんかと比べたら、周りが良すぎでお前以外なら誰だっていいって分かっちまうよ…」
「はぁ！？なんなわけ！？チビだから分かんないだけでしょ！？」
んだとテメェ！身長は関係ねぇだろぉが！と、再び喧嘩勃発かと思われたが万里さんは付き合ってらんないから行くわと言って出ていってしまった。何とも気まずい空気。
どうしようかと悩んでいると龍太君は一度私を睨んで、そのまま屋上から出ていってしまった。
このまま一人で屋上に居ても仕方ないので、私も自分の教室へと戻った。

＊＊＊＊

「ひゃあ…あんたよく無事だったね」
吃驚しているのは私の唯一の友達ヨシちゃん。存在感がない私だけど、ちゃんと友達がいる。
「大げさだよ…」
「なにのんきな事言ってんの！？神木がもてるのに何で今まで彼女がいなかったのか知らないの？」
「…知らない」
と言ったらため息をつかれた…。
まぁ沙耶だもんね…と言われたけど、何で！？
「矢吹兄妹のせいって話。神木を好きだって噂が流れたらすぐ潰しに行ってたみたいだよ」
まぁ現に泣いてる所見たしと爆弾発言。
「潰し…」

余りに物騒な言葉に背筋が震える。
「沙耶の場合神木からの告白っていう矢吹兄妹の盲点をついた出来事だったからうまく実ったと私はにらんでるんだけど。まぁだからあんた気をつけなよ？」
何のことだか分からず、きょとんとしてるとヨシちゃんの顔が近づいてきた。
ち、近すぎないかな…？
「矢吹兄妹もだけど、今まで矢吹兄妹に邪魔されてた人たちからしたら沙耶の存在はかなりおもしろくないんだから一人にはならないようにしなきゃってことよ」
そっか、そんな心配もあるんだ。悲しいけど、確かに何の取り柄もない私だし、周りが納得出来ないのは仕方ないと思う。
でも、
「ヨシちゃんありがとう」
こうして私を心配してくれる人がいる。それが本当にありがたくて、嬉しい。
また締まりのない顔になってしまったのはしょうがないよね。
「くぅっ…神木もこういうところに惹かれたのね」と呟いたが、その声を拾うことが出来なかった。だって、その時いつのまにか来ていた神木君に話しかけられていたんだもん。
「梁取さん英語の教科書ある？貸してほしいんだけど」
忘れて来ちゃってと申し訳なさそうに言う。
「うん、あるよ。待ってね」
机の中をごそごそとあさる。
そういえば。
「さっきの呼び出しは大丈夫だったの？」
「あ…それが俺にもよく分からないんだけど、行ったら鍵かかってて…教務室に行って聞いても分からないって…」
そう、不思議だねって二人で笑っていたから、まさか周りがその会話に聞き耳を立て『それ絶対矢吹兄妹の仕業だろ！！』って思っ

ていたなんて知らなかった。
「おっ、瞬じゃん。なに？忘れ物を口実に彼女に会いに来たの？」
神木忘れ物とかしたの見た事ないよなと神木君の友達である小林君と佐藤君がにやにやしながら話かけてくる。
その瞬間神木君は顔を赤くしてしまった。
え？
「ま、まじかよ！お前っ可愛いなぁ…」
「あっ…じゃあ俺もうすぐ授業始まるから行くね」
梁取さん、また…と言って神木君は教室を急いで出ていく。
顔を赤くした私はそれを呆然と見ていた。
「梁取さん愛されてるね」
と佐藤君言われてより一層頬が熟れた果実のようになってしまったのは言うまでもなく…
蒸発してしまいそうな私を見て、ヨシちゃんもにやにやしながらも大切なことを教えてくれた。
「追いかけなくてもいいの？Bクラスは次移動教室だったはずだけど、それまだ渡してないんでしょ？」
指を指された先にあるのは先ほど貸すつもりで机から引っ張りだした英語の教科書。
たぶん…多分だけど、あの様子だと神木君は教科書を忘れてきてないんじゃないかなって思う。
それでも、私は彼を追いかけたい。
追いかけて、たくさん話をしたい。
「う、うん！行ってくるね」
そして私も神木君と同じ様に急いで教室を出た。

＊＊＊＊

「神木君！」
結構時間が経ってしまったのか、私の足が遅いのか、渡り通路に

彼は居た。
突然の私の声に驚いたようで、吃驚した顔でこちらを振り向いた。
「梁取さん…どうして…」
まだ初春な今、太陽の光を浴びてもまだ寒く、さわさわと葉の音が耳に心地よい。この渡り廊下は外にあり、周りの緑が更に彼を素敵に見せているのは私の欲目なのか…。
「あの…これ」
立ち止まってる彼に、鼓動を落ち着かせながら近づき、ソレを差し出した。
「あ…うん、ありがとう」
少しはにかんで、受け取ってくれた。
少しの沈黙。
頑張れ自分。と活を入れ、神木君を仰ぎ見る。
「あのっ…さっき、神木君が…用があってでも来てくれて、すごく嬉しかったよ…あの…ありがとう」
恥ずかしくて。それでも本当に嬉しかったから意識せずに笑顔になってしまった。
「俺も。…そう思ってくれて嬉しい。」
真っ赤にさせた神木君がふにゃりと笑った。その顔がすごくすごく可愛くて、胸がきゅーんとなる。
絶対さっきより顔が赤いはずだ。
教科書を受け取りながら彼は、「本当は教科書あるんだ…けど、昼はあんまり話せなかったから」と言って照れて笑った。
その後他愛もない会話をしていたけど、予鈴が鳴り、寂しい気持ちを抑えながら別れた。

＊＊＊＊

校舎へ入る扉の前に来て、ふと声が聞こえる事に気が付いた。
正直あまりいい雰囲気がしない声色に、ビクビクしながらも近づ

いていったのは、何故か行かなくてはいけないと、心が訴えていたのかもしれない。

＊＊＊＊

生徒たちが自然とふれあい、豊かな心を育てて欲しいと願って作られた校庭は至る所に緑があり、上手く人影を隠してくれる。そんなこともあり、本来の目的とは（ある意味では正しいのかもしれないけれど）違った用途で使われていた。

現にこの時間に、ここに人が居てはいけないだろうにいるが、誰にも気づかれない。

「お前マジ生意気なんだよ！！なんだよその目！喧嘩売ってんのか！？」

「はぁ？てめぇらから売ってきてんだろ。お前等に何かしていいこともねぇしな」

ふざけんなと怒気の孕んだ声と共に龍太君の胸ぐらを掴まれる。

そう、声がした先にいたのは龍太君たちで、私は何も出来ずそれを遠くの校舎の角から様子を伺っていた。

助けるにしても私が出ていったのでは明らかに龍太君の邪魔になる。どうしようかと考えていると、周りにいるガラの悪そうな人が何かに気づいたように意地の悪い顔をした。

「てかこいつゲイだって噂の奴じゃん」は！？なんだそれとゲラゲラと周りが笑いだした。

それに龍太君はぴくりと動く。

「なんか幼なじみの男が好きだってすっげぇ噂なんだよな。その相手の男も悪い気してねぇのか、こいつとすげぇ仲いいらしいぞ」

まじかよ！そいつもお仲間か！？てか俺たち大丈夫かよ！と一層酷くなる笑いに、龍太君の声が静かに響いた。

「何がおかしい。好きだって気持ちを笑うお前等に理解できるかどうかは分からないが、あいつは笑われて良い奴じゃない。」
まぁお前等みたいに腐った頭じゃ分からねぇだろうがなと嘲った。
それにカチンときたらしく、一気に彼らの取り巻く雰囲気が剣呑なものに変わった。
もちろん龍太君はすでにキレていたらしく、今にも殴りかかりそうになっていたが、私はそれに気づかない。
なんとかしなくてはとそればかりが頭を巡る。
意を決して、私は肺に空気をいっぱい吸い込ませた。

1（後書き）

漫画で描こうとしていたお話。なのでページ数的にヒーロー（神木君）との絡み少ないです。（それってどうなの！？）
続けれればめちゃめちゃ絡む予定です。

2

「先生〜！こっちです！！」
古典的だと言われようがこれしか案はなく、震えそうな声をなんとか堪えて叫んだ。（でも震えてしまった…）
もちろんこの時に最悪なことを想定して（嘘だと見破られて、私自身も捕まるというパターン）すぐ隠れられる場所を確保しながら。
その声に驚いて彼らは走って逃げていった。
ふぅー。作戦成功。心臓がバクバクとうるさいくらいに脈打ってる。でも彼らが戻ってくる前に龍太君を———
「なにやってんだよ、あんた」
え？と頭上を見ると龍太君が上から怪訝な顔をしてのぞき込んでいた。
隠れられていると自信を持っていたのにバレバレだったらしい。
ヒヤリとしたがあの恐ろしい彼らは居ないのだから成功のハズ…だ。
「と、とりあえずあの人たちが戻ってくる前に、に、逃げよう」
と腰を上げようとしたが、ダメだった。　腰が抜けていたらしい。
さらに渋い顔をされる。
「あいつらは戻って来ねぇよ。そんな度胸ある奴らじゃねぇし」
そっそっか…。ならよかった。
ほぅと息を吐くと龍太君は理解できないといった顔をして訊いてくる。
「あんたさ…瞬の話を聞いた感じだと、こんな真似できるように思えなかったんだけど、なに？作ってたわけ？」
射抜かれそうな目に背筋が震える。
口の中がカラカラで声が上手く出なくて、頭を振った。
そして、何とか声を絞り出す。
「ち、違っ…だって龍太君は神木君の大切な人だから」

だから、こういう時に動けなかったら、絶対後で後悔すると思ったから。
神木君と出会って少しずつだけど自分で行動しようと思った。ヨシちゃんともそうやって仲良くなれた。
どさりと音がして隣を見ると龍太君が座っていた。
「あんた、変な奴だな」
「え？」
「冷静に考えてみれば、あんな震えた声、作ってる奴にしちゃ間抜けだしな…腰も抜けてるし」
ふ、震えてたのもバレてたんだ。
「なぁ、あんた。瞬のどこが好きなわけ？」
探られるような鋭い目で問いかけられて、緊張してしまう。
だって彼にとって大切な問いのはず。
「…神木君は気づいてくれたから…」
目が怖くて、俯いてしまった。
「は？」
「私、あまり周りから気づかれないみたいで、みんなで何かしようって言う時とか何も言えなくて、出来なくて…でも神木君は気づいてくれたの。それが私にとってすごく嬉しくて、特別なことだったの」
「ふ～ん。自分から動きもしないで…他力本願だな」
嘲るように言われた言葉はその通りで。分かっていても胸が痛い。
「…うん、そうなの…」
「はっ、認めるんだ。じゃあこれからも瞬におんぶだっこしてもらうっていうわけか！！」
怒鳴られるように言われた言葉に、頭を振って答えた。
「違う。だからこれからは自分で動いて行こうと思って…少しでも瞬君に何かを返してあげたくて…まだなんにも出来てないけど…」
「…」
「きっと万里さんが彼女だったら瞬君を幸せにしてあげられるんだ

ろうけど、瞬君がいいって言ってくれてる間は頑張りたいから」
「無理だよ」
「…え？」
「あいつは瞬君を幸せにできない。」
あいつって万里さんのこと？
「どうして…？あんなに大好きなのに…」
「万里は自分勝手だから、本当に瞬のことを考えてやれない。いつだって頼りっきりだ。そしたら瞬はきっと甘えられない。」
絶対にそれはさせない。と言った。
あまりに真剣なその顔になんと返して良いか分からなくて、俯いていたら龍太君がポツリと言葉をもらした。
「あんたに怒ったけど、あれ、本当は自分自身に対してに言ったようなもんなんだ」
「え…？」
「結局俺も瞬に頼りきってんだよ。…あいつのために何にもしてやれない」
さっきの奴らにも瞬を誤解させたままだしなと悔しそうに呟いた。
「…俺たちの親ろくでもねぇ奴らでさ…顔も見たくねぇし、家にも帰ってなかったんだ…そん時瞬に話しかけられて…瞬にとってはなんて事ないことかも知んないけど、俺はすっげぇ救われたんだ…多分万里もそうだから、あんなに執拗する」
そう話す龍太君はいつもの鋭さはなくて、すごく落ち着いていて、優しい顔にみえた。

「なんでその話を…？」
きっとあまり話したくないんじゃないかなって思う。
「たぶん…あんたも同じだと思ったから」
こちらをじっと見ながら龍太君は静かに言った。でもすごく胸にくる。

そう、きっと同じ。
誰かに訊かせたら「そんなことで」って笑われるかもしれない。
それでも私には、私たちにとっては、かけがえのない出来事で…
大袈裟かもしれないけど、世界が変わったって言えちゃうくらいで。

「だから瞬が傷つくような相手だったら俺は容赦しない」
はっきりと、私を見て言った。
「俺はまだあんたを認めた訳じゃない。瞬とつき合えたからっていちゃつけると思うなよ」
うん。分かるよ。分かったよ。
彼がどれだけ、大切な人なのかって。
「うん。頑張る」
って言ったら何故かすごく顔を歪ませた。
「意味分かってんの？二人っきりになんてさせてやんないって言ってんだけど」
「うん。それは分かってるよ。彼女になったからって三人の邪魔はしないよ」
彼女になったからって、三人の関係の方がずっとずっと強い。それなのに後から出てきた私が旬君を独り占めするなんて出来ない。だから三人の中に居させてもらえてるこのこと自体がすごくありがたいことだと思う。
まずは二人に認めてもらえるようにしなくちゃ。
そう思っていったのに、付き合ってらんないとばかりに背を向けられた。
「別に助けなんていらなかったけど、腰抜ける思いしてまで頑張ったみたいだしお礼くらい言ってやるよ」
と言って歩いていってしまった。
一歩前進出来た気がして、嬉しくてその後ろ姿を見送った。
その姿を校舎から誰かが見ていたなんて気づくはずもなく…。

3

軽やかな動きにスカートが踊り、すれ違う人はその姿を目で追った。
視線を浴びている可憐な少女は、前方に愛しい人の姿を見つけるとすぐさま飛びつき腕を絡ませる。
「万里またお前は…」
瞬は絡められた手を離そうとするが意地でも放すまいとする万里によってそれはかなわず、半ば諦めてしたいようにさせる。
それを機嫌良さそうに万里は笑った。
「機嫌がいいな。どうした？」
うん？と上目使いに瞬を見るその姿は、他の男であったならころりと落ちてしまうほど、可愛い。　そして花がほころびるように笑った。
「瞬ちゃんは龍太が幸せになれたら嬉しい？」
質問の答えと違う気がするが瞬は笑顔で「もちろん」と答えた。
「万里もね、龍太が幸せになれたら嬉しいなぁ。だからね、お手伝いしてあげようと思って。そしたら瞬ちゃんも協力してくれるよね？」
「当たり前だろ。何をすればいい？」
その言葉に満足したように万里は笑う。
「じゃあその時になったら言うね」
もう少し一緒に居たかったが、するべき事がある。
するりと腕を放した万里はにっこり笑った。
「じゃあ瞬ちゃん、万里頑張るね」
楽しみにしててと言葉を残し、来たとき同様軽い足取りで去っていく。
状況を理解出来きるはずのない瞬は、ただその背中を見送った。

＊＊＊＊

「万里さん…どこに行くんですか？」

私は今万里さんの後ろを追うように、校庭を歩いていた。

そう、あの龍太君が怖い人たちに絡まれていた校庭、だ。

「うん？もう少しよ。」

にっこりと微笑まれると何も言えず、また後ろをついて行く。

龍太君と話をしたのは昨日。

今日も三人でご飯を食べたけれど、昨日と変わらず、私は空気と化していた。みんなご飯を食べ終わり、それぞれの教室に戻るときに、万里さんに呼び止められたのだ。（神木君は、万里さんがあまり構ってこない事をこれ幸いとした龍太君に引っ張られていった）

ヨシちゃんが言うように二人っきりにならない方がいいのかもしれないけど、龍太君のように話してみなければ相手の考えていることは分からない。認められていないにしても、認められるためにはまずは話をしてみなければ始まらないと思う。

「万里ね、龍太のことはムカつくチビで邪魔だとは思ってるけど、幸せになって欲しいと思ってるの…」

頷いていいのかしらという言葉が含まれていて、返事に困る。

あまり使われていない体育倉庫の前まで来て、万里さんは扉の取っ手に触れた。

「だからね、万里が恋のキューピットになってあげようと思って！万里には瞬ちゃんより龍太がいいと思わないから分からないけど、女の子ってドラマチックなのが好きでしょ？」

ど、どうしよう。これは世にいう恋愛相談というものなのかな。まるで経験がないからなんと答えていいか分からないが、女の子はドラマチックが好きなのは確かだし頷いた方がいいのかな？

「えっと…」

「それでね、そうなると男たちから救ってくれたってかなりきゅんとくると思うんだけど、それで龍太が怪我でもしたら瞬ちゃんが悲

しむかなって…」
別に万里はいんだけど…龍太意外に喧嘩強いから楽しくなさそうだし…と呟いていて、口を挟める隙がない。
私の意見を求めていた訳ではないらしい。
「そうなるとやっぱり女の子かなって思って…大丈夫！すぐに助けを呼んできてあげるから！」
開けた扉に万里さんは私をえいと突き出した。
その力に抗うことなく尻餅をつく。
中には派手目な女の子達や、少しきつそうに見える子など、たくさんいた。
ヒリつくお尻は気になるけど、それよりもっと気になるのはその女の子たちが私の背後にずらりと並んでいることだった。
「ちょっと矢吹！うちらをここに呼んでどういうつもりよ！やっと謝る気になったわけ！？」
「え～？万里がなんで謝んなきゃいけないの？何にもしてないのに…」
よくもぬけぬけと！！とギリギリと歯を食いしばる人は、きれいな人なだけにすごく怖い…。
「万里はただみんなに協力してもらおうかと思って！」
「はぁ！？協力！？なんで私たちがあんたの協力なんてしなきゃいけないのよ！！」
「ふふふ…じゃーん！！なんとこの子が今の瞬ちゃんの彼女です！」
両手を広げて私を紹介してくれたけれど、あまりのことに唖然としたままだった。
たぶん気のせいじゃないと思うんだけど、“今”を強調していた。
「は？この子が？」
「納得できないんだけど」
みんな一斉に私を見ながら言っている。頭上からは無数の視線が……痛い。

「じゃあ万里はもぉ行くね」
冷や汗が背筋を伝う中、注目が逸れた万里さんは元気いっぱいに言葉を残し、笑顔で去っていった。
待ったを掛ける暇も無く、冷たく頑丈な扉が目の前で堅く閉ざされるのを私はただ口を開けたまま見送った。
後ろからはなんだか不穏な空気が流れていて、振り向く勇気はもちろん、…無かった。
この時には万里さんの話はすっかり忘れていた私で……えっと、これから私はどうすればよいのでしょうか…？

4

きた道を軽い足取りで万里は歩いていた。
なにせ先ほどまで善行を行っていたのだから、重くなるはずはないだろう。
つい抑えられず笑みを浮かべていると前方からよく見知った、愛しい声がかかった。
「万里！？梁取さん見なかった！？」
が、内容は気に食わない。ついついむくれてしまうのは仕方ないことだろう。
「…知らない。」と言って腕を絡めたのにそれどころではないというように、すかさず引っこ抜かれて更に面白くない。
「まだ教室に戻ってないって…」
そういって今まさに万里が来た道を行こうとするものだから万里は焦った。
「瞬ちゃん！！そっちになんて何もないよ！まずは保健室でしょ！！」
「もう吉田が見て、居なかったから俺のところに来たんだよ！」
吉田とは沙耶の友達でヨシちゃんと呼ばれている子だ。
内心で余計なことをと舌打ちしつつも、行かせてなるものかとセーターを引っ張るが、力にかなうはずもなくずるずると引きずられ、万里はすぐに降参した。
「瞬ちゃんストーップ！！万里に協力してくれるって言ったでしょ！？龍太の邪魔する気！？」
さすがにその言葉で止まってくれた。
「え？龍太、今、そうなの！？」
何度も頷き、万里の必死さが伺える。が、瞬は再び歩きだす。
「瞬ちゃん！！」
「大丈夫。龍太の邪魔はしないでこっそり探すから」

「ダメダメだめ――――っ！！」
「何やってんの？」
「瞬ちゃんが龍太の邪魔しようとするからでしょ！」
「俺の邪魔？」
別に瞬ならいいけどときょとんとした龍太が二人を見ている。それもかなり近くで。
「「龍太！？」」
二人の叫び声は綺麗に被り、その顔も驚きが現れている。
すでにこの時点で龍太は嫌な予感がしていた。
「お前、今告白中なんじゃ…」
「はぁ！？告白？誰にだよ…」
「誰って、万里が…」と言って、二人の視線はそこへ集中し、万里は顔を青くさせた。
「万里…どういうことだよ」
いつもなら何とも思わない龍太の顔が、何故か今日ばかりは怖いと感じる万里であった。

＊＊＊＊

「梁取さん！！」
突然後ろの扉が開くと同時に切羽詰まった声がして、吃驚しながら振り向いた先には神木君がいた。
おらちゃんと歩けよ。と龍太君に引きずられる万里さんの姿も神木君の後ろから見える。
そして私を見た神木君の顔は驚きに変化した。
無理もないと思う。
正直自分でもこの状態に驚いてどうしたものかと思っていたのだから。
そう、私は大人数の女子に囲まれ正座をして（そうしなくてはい

けないと恐怖概念で体が勝手に動いてしまった）彼女たちの愚痴を聞いていた。
———主に万里さんへの。
そして沈黙が走る。

「…えっと…、これはどうしたの？」
真っ先にこの沈黙を破ったのはもちろん神木君で、その一言で彼女たちの抑えは吹っ飛んでしまったように勢い良く（時には涙ぐむ子まで）神木君の側へ駆け寄っていく。
「瞬く～ん。聞いてよ！あのねっ前私が瞬君の目の前でスカートの留め具が吹っ飛んで、パンツ姿になっちゃったのは決して私が太ったわけでも、痴女なわけでもなくて万里が—」
「それを言うなら私だって何もしてないのに瞬君の前でいきなり万里に、まるで、私がっ！オナラをしたって反応されてっ！誤解を解く前に万里に連れてかれちゃったけど本当にしてないの！あれは万里が—」
「私だって万里に！」
「—万里が！」
「万里にっ」
次々に弁解が殺到し、神木君も訳が分からずたじろいでいる。が、彼女たちは必死になっているので、そのことに気がついていない。
そしてさっきも聞いていた内容だけど何度聞いても壮絶だと思う。
好きな人の前でそんなことが起きたら私は立ち直れないし、告白なんて出来るわけがない。と言うより学校にすら来たくない。
ヨシちゃんに気を付けろと言われたけど、話を聞いていると気を付けようがない事ばかりだった。
「ちょっ、ちょっと！！何よこれ！？何で万里が悪者になってるの！？」
いつまでたっても止むことのない万里さんの所業の抗議にさすがに耐えきれなくなった万里さんが顔を真っ赤にさせて声を上げる。

その瞬間みんなの反応は、怖かった。
いっせいに万里さんを般若のような顔で睨み付けた。
きっと神木君からは後ろ姿しか見えてないから気がついてはいないけれど、万里さんはもちろん私と龍太君はばっちり見える位置にいたため、あまりの怖さにビクリと肩を揺らしたまま固まってしまった。
「よく言うわよ！！瞬君の彼女をここに連れてきて私たちにシメさせるつもりだったでしょ！？」
「なっ何よ！私はただ龍太のためにしただけじゃない！」
その言葉にすかさず龍太君が反応した。
「おい！そんなこと頼んでねぇしお前の勘違いだろ！」
「ふん！どうせ、イジメてる所に瞬君を連れてきて私たちを嫌わせようとしたくせに！誰がその手に乗りますか！」
誰も龍太君の反論は聞いてくれないようだけれど、どうやら万里さんの独断だとみんなは分かってるようだ。
「今までの悪事全部瞬君に怒られればいいのよ！」
そうよ！そうよ！と女子たちは声を揃えて「瞬君後はよろしくね！」と、みんなすっきりしたように倉庫から出て行く姿を私たちは唖然と見送ることしかできなかった。
嵐が去った。まさにそんな感じだ。

「……万里、今の話は本当？」
静まり返った倉庫に神木君の声が響いて、万里さんは肩を揺らした。
「…何のこと？…それに、今日の事なら瞬ちゃん協力してくるって言ったじゃない」
「協力はするよ？でも梁取さんなら話は違う」
ぐっと万里さんは唇を噛み締めた。
なんの話でしょうか？と聞きたいけれど、そんな雰囲気ではない。
しかし龍太君には関係ないらしい。

「てか真面目なところ悪いんだけど何でそんな誤解があんだよ？」
確かに万里は頭おかしいところがあるけど、と龍太君が言葉を挟んだ。
「隠さなくってもいいじゃない！万里は分かってるんだから！」
「分かってねぇから聞いてんだよバカ！！」
「バカですって！？チビの龍太に言われたくない！！」
「だからチビは関係ねぇだろぉがっ！！」
あの…話が脱線していますが…。
「――万里」
神木君の静かに問う声が響いて万里さんは口を噤(つぐ)み、観念したように口を開いた。
「…だって昨日見たんだもん。龍太がその子と見つめ合ってるのを」
万里さんが私を見る。

……

……えっ！？わ、私！？
「みっ見つめ合っ！？」
「はぁ！？いつそんなことしてたっつぅんだよ！？」
「してたじゃない！！昨日授業サボって5限目に校庭でっ！！万里見たって言ったでしょ！？龍太女子と話すどころか見つめ合うなんてしないのに、してたってことは好きって事じゃない！！」
昨日…。言われて気がついた私と龍太君は同時に声を上げた。
「「あっ！！」」
慌てたように龍太君が続ける。
「ばっ違(ちげ)ぇーよ！！なんでそうなるんだよ！！」
助けを求めるように神木君を見た龍太君は何故か固まってしまった。
「違っ、昨日絡まれてたところにこいつが助けに来ただけで見つめ合ってなんかねぇよ！そん時話しただけだ！」
「それで恋に落ちちゃったんでしょ？男の子もそういうのに弱いも

んねっ！」
　万里は分かってるからと胸に手をおいたのを見た龍太君は青筋を立てた。
「お前っマジ黙れよ！！話がややこしくなんだよ！！」
　てゆーかアレだろ！俺と瞬を仲違いさせて瞬を独り占めするための作戦だろ！と、見てるこっちが痛くなりそうなくらい思い切り口を鷲掴みにした龍太君に、痛いと万里さんは抗議をしている。
　助けた方がいいのだろうかと悩んでいると神木君がいつの間にか目の前まで来ていた。
「それ、本当？」
「え？あ、うん。あんまり役に立ってなかったみたいなんだけど…」
「…大丈夫だったの？」
「う、うん。そんなに度胸ある人じゃなかったんだって。だから龍太君無事だったよ」
　安心してって意味で笑ったら何故か抱き寄せられてしまった。
　あまりに突然で心臓が暴れ出して顔が熱くなる。
「か、神木君…？」
「龍太もだけど、梁取さんのことだよ？」
「え？」
「大丈夫だった？」
　かぁと顔が赤くなる。
「う、うん…」
「さっきも？」
「う、うん…ただ話を聞いてただけだから…」
「そう…よかった」
　そう言ってぎゅっと腕に力が加わってさらに神木君の胸に密着する。
　すごくドキドキして落ち着かないはずなのにこの温もりに安心してしまう。
　ほぅと息を吐きながら神木君に体を預けるように抱きしめ返すと

頭皮に激痛が走った。
「いっ痛―っ」
「何してるのよ！！瞬ちゃんから離れなさいよ！！」
頭からブチブチと髪の千切れる音が聞こえる。
あまりの痛さに涙が溢れてくる。
「止めろ万里！！」
いつもの神木君から想像もできないほど怒った声が響いたとたん、髪を引っ張る力が弱まった。
今度は守るように神木君に抱き締められて、混乱した頭で万里さんを見ると顔をくしゃりと歪ませて涙を流したまま神木君を見ていた。
「万里…何してるのか分かってるのか？梁取さんに謝れ」
「な、なんで！！何で万里が悪いの！？その子が私から瞬ちゃんを奪ったんじゃない！！」
「万里っ！勘違いしてるみたいだけど俺が梁取さんを好きになって告白したんだ。梁取さんが悪い事なんて何一つない」
「…何で！？何でその子なの！？別に可愛くもないし、万里の方がずっと前から好きだったのに！万里の方がずっと瞬ちゃんを好きなのに！その子が彼女でいい事なんてないじゃない！！」
ズキリと胸が痛い。確かにその通りで、自信を持てるところもない。それなのに私が神木君の彼女で本当にいいのかな…。
知らずうちに体を堅くさせていたらしく、そんな私を安心させるかのように神木君が頭に顔を寄せて髪を撫でてくれた。
「俺には梁取さんはすごく可愛いよ？それに彼女は俺にとってココアみたいな存在だから…」
「…ココア？なにそれ？」
納得できないといった顔で万里さんは神木君に訊く。
「梁取さん…覚えてる？」
顔を上げるように神木君の手が頬に添えられ、にっこりと微笑む神木君を見つめ返した。

「ココア…？」
「そう」
覚えてないよね。と残念そうに呟いたけれど、忘れるはずがない。
だってそれは私が初めて勇気を出して神木君に話しかけた時のことだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9593x/

ここあ

2011年11月23日16時53分発行